取ってきて，ヨナベ（夜業）に裏（トマ）を網んだ。旧／／月ごろから畳サシだった。

ハオリ・キン（着物）・各家で夜ナベだ。砂運び。ザミジィ（炊事した後の水）は，たまるものだった。そこも，くみあげ，砂をまいた。

カキマワリ（垣根の手入れ），ムチツキ（餅つき）29日，飾り餅，年取り餅，のべ餅など。ウスでムチついた家／軒（／978年正月）。モチつき器械を使うか，ムチ屋へ依頼。飾りつけ・先祖棚，床，諸道具などに餅を飾る。床ムチが，われた時は，マーレドゥシ（生産物がよい年）といわれる。

アシザ。子供の為には買っても大人は，手作りだった。

薪・／日／回しか行けなかった。カネソィ，クンミチ，ヒジマがり，カンザンノウ，ヰギョ，マツヤマ，ハアーグラなどへ行った。豚，大正の終わりから，昭和初期までは，各家で殺した。4斗入りしょう油ダルに塩付けし，数日後，サスィヤに陰干しした。3～4月の田植えごろまであった。

・オーバリ・サスィヤに木を横たえ，クワ（農器具の代表）や人参，大根，コーシャなどを，ぶら下げていた。しめなわは，ほとんどない。いつごろからしなくなったか不明。門松に，松，竹，ユズル木を立てる。この上にウラジロを門の両方においてある家有。床にも松を飾る。

トゥシヌユル（年の夜）

年取り祝をする。年取り餅を2個ずつ配る。年重ねの意味。ツバサ（つわぶき）と，ワンフネ（豚骨）の煮物は欠かせない。あれこれしているうちに元旦になる。

ヨ）その他

毎月，／日，／5日は，墓参をする。水や花香を持っていく。

第9章　芸能・競技

イ）芸　能

「うでまくら」

手で，にぎれるほどの石を各人が持ち，輪を作る。　唄を歌いながら隣りの人に渡していく。本来，これに伴なった唄があったかもしれないけれども不明。どんな唄でもよく，だれかが歌い出すと続けて歌った。大正5年生の人は，「あいたさみたさ」「空にさえずる鳥の声」「／年は365日」「家を出る時笑い声」などを思い出した。「ちゅきゃり節」「はやり節」なども歌った。意中の人がいるので，ネェセ，メェラベの輪は，特にはずんだ。主にマーネ遊び，アジラハネ，ミネィ遊びなどの日に行なわれた。うでまくらは，城，見里などにも

あった。市では，「米つき踊り」ということで伝承されている。

「棒踊り」

昭和の初期ごろまで「君が世」棒踊りがあった。

きみーがーよーお　サーサー　エイエイ　さざれ　石の　イーワーオーと　なりーて　こーけのー　むすまで　エー　あらそい　そい。

しっかりした伝承は不明。戸口の人，タミジロウが教えた。4人／組でしたという。日の丸の八巻をし，じゅばんと白ズボンをあつらえて作ってあった。青年男子で30人ほどいた。

川内には，「テン　テンノ　シトルクテン　サー　いかなる腕前　いじるかなー　シトルクテン　テン」と歌われる棒踊りがあった。

見里，西仲間のソーウドリ以外にも棒踊りがあったことがうかがえる。

ナギナタ踊りといって，鎌とナギナタを打ち合う踊りもあった。あつらえて作ってあり，打つと火花が飛んだ。

「祝の座敷」

(あ) エーイ　エーイ　今日の座敷は，祝の座敷　亀が歌えば　なー　つるが　舞う　舞う　亀が歌えば，つるがも，ーる。

(い) しぃーしぃー　さだんぬ庭のソテツ　花が盛んちなー　花ぬ　ちゅらさ(美しさ) 花ぬ盛んち　なー。

(う) たけにのぼらば　かさかちのぼれ　雨が降るちぃなー　はょーぬぶれ。

(え) 君は百才わしゃ九十九まで，孫に白髪のねーはえるまで，はえるまで。

「新築祝唄」（めでたい節）

(あ) さても　めでたい　新築祝　ソレソレ　めでたい。色が　かがぐわしき　サンサ　花の御殿　めでたい　めでたい　ソレソレ　めでたい　めでたい　めでたい。

(い) 千代に栄えと鶴亀集め　ちと世　八千世まで　サンサ　松のおみどり。

(う) きもの　もてなしゃ　うめのごと　におい。き（ぎ）りの節々や　さんさ　竹の中に。

(え) きゅーぬ喜びや神様飾て　わんや　下さがて　千代の踊り。

「祝の座敷」と「新築祝唄」は，昭和／3年，和瀬分校が現在地に移り，木造校舎を落成しての祝賀会に，時の分校教師で，沖永良部出身のナガシマヨシが演芸に教えたものである。ヨシは，当時，主人が東城本校勤務で乳飲み子もおり，子守りも連れてきておられたという。八月踊りも芸能に入るだろうが，民謡の所で取り上げたい。

ロ）競技と遊び

4月に行なわれるハマオレ（浜下り）には，舟こぎ競争が行なわれた。はっきりした組分けなどは不明だけれども，5そう位の舟に分乗して行なわれた。昭和23年生のH　なども記憶にある程度であり昭和30年代の初めごろまであったといえよう。すもうは，8月の十五夜祭に行なわれる。

子ども遊びについて述べたい。

子どもの遊びは，ほとんどが競争である。1977（S52）年4月17日に15分間で知っている遊びについて書いてもらった。小6女子2名，中1女子1名，小4男子1名である。「君達が知っている遊びを書いてごらん」　ひまわり，印度人の黒坊，十字架，かかし，ゴム飛び，ブランコ，すべり台，泥警（泥棒と警官），陣取り，メートル，登り棒，シマ取り，ゴー，野球，鬼ごっこ，うんてい，くつ隠し，縄飛び，目隠し，カンけり，馬飛び，鉄棒，サッカー，バトミントン，ちゃんばら，カタツムリ，おしくら慢頭，イシャトマンニャ，チューブ，タイヤ，トランプ（10種類），戦争，砂取り，ゴム鉄砲，影踏み。小4男子2名にゆっくり思い出しながら書いてもらったら上記以外にぽこぺん，ぐにゃぐにゃ道，面積，豚のしっぽ。

外に観察した遊びに，トンボ取り，草矢，ピストルの玉（カンナの実），団子作(土で)り，ソテツ葉の虫かご，ソテツの実の笛，人形，墓地遊び，砂遊び，魚取り，タナガ（川エビ）取り，ガン取り，メジロ取り，クワガタ取り，椎の実拾い。

伝承遊びには，ゴーリャ（直径6cm，厚さ3cm位の丸太の輪を両方から棒で打ち合う）。ネィンウチ（細い木の先をとがらし，地面に打ち込み立てる。打ち倒した方が勝つ。）ィファウチ（短く細い棒を一端を斜めにけずって ⟍ 状にする。たたくと上にあがる。上がった所を横打ちしてとばす。）

カクレムン（隠れん坊）

第10章　口承文芸

イ）民話

和瀬の民話については，すでに発表している。話数は，100話をこえている。民話のことをムンバナシという報告をしたけれども，トキバナシという言葉もあることがわかった。田中義吉（明治35年生）は，カツオ漁業についての話をしている時に「トキバナシど　なりゅっか」（トキバナシになるが）と自然に使っておられた。『和瀬の民話』で掲載していない分で，シマにあることが確められた話は次のようである。

人間のしぶでり（脱皮），石ウチィキ（置き），アハーウシヌメィ（赤牛の目），霊は，用岬へ行く，ヒジャマ（火の玉）話，鯨の年頭，テンゴの神，海からのネズミ，ケンムンとシワリ（シャコ貝）。（以上，与ツル　明治41年生）。石のすり粉忘れたか（泉牧貞）

ロ）なぞなぞ

なぞなぞのことを言い切り話という。「○○は，ぬぅー（何）」「○○は，ぬぅーが」と子供同志，問いを出し合い答えた。他に特別，決まりはなかった。

（あ）あっちん　あっちん　ひならんや　ぬーが。ーまん道ー（歩いても　へらないのは。ー馬道ー）　答えられないとき「かぶろー」と言った。

（い）うぶーら　いりりば横ち　いじるにゃ　ぬぅーが。ーしるしー（上から入れると横から出るのは。ーすりうすー）

（う）うやぬ　くしゅまぁりば　くわぬ　さぁれりゅんや　ぬーが。ー舟とゆとりー（親が，くそをせば，子がそうじするのは。ー舟とあかくみー）

（え）うやぬ　道あけぶりば，くわぬ　まぁりうゆむ　ぬぅーが。ー針とい　と　ー（親が道をあけると子が後から追うもの。ー針と糸ー）

「かん　くぅー」「あい　あい」ぬーが。ーうぎぬ葉とうむぬ葉ー（「こっち　こい」「いや　いや」　ーキビの葉と里イモの葉ー）

（お）かまちん　かまちん　しばべぇーり　ブルブルしゅんや，ぬーが。ーたんにゃー（食べさせても舌ばかりブルブルするのは。ー田ニシー）

（か）きょーでみぃ　ちゃり　たまてぃち　はちゅんや　ぬーが。ーかのうー（兄弟3人で，玉を1つはいているのは　ー五徳ー）

（き）くるさんば，　あーさんし　あぶりゅんや　ぬーが。ーナベと　まぁ　ちー（黒いのを赤いのであぶるのは。ーナベと火ー）

（く）たぁーりし。かまちぬてぃーち　あんや　ぬーが。ー火ばしー（2人で頭が一つあるのは。ー火ばしー）

（け）ちゅーまき　きゅび　しゅんや　ぬーが。ーぬきくるハターー（ー巻き帯しているのは。ー糸くり機ー）

（こ）昼や　あがんいきぶー　よーねや　ちゅ道　ぬーが。ーやどー（昼は，向うえいけ　夜は，いっしょ。ー戸ー）

（さ）やんくぅし　こぉーぶり　ぬーが。ーうむん葉ー（家の後ろで頭をふっているのは。ー里イモの葉ー）

なぞなぞは，厚ヨシ（明治39年生），田中テツ子（大正5年生）による。

ハ）ことわざ

ことわざと限定はできないけれども長い間に培われてきた言葉の結晶を，いいぐとぅ（言い事）といっている。とても豊かに伝承されており，限定された紙数では，掲載できない。『住用村和瀬のことわざ』ということでまとめる予定であるので本文は，省略させていただく。

ニ）民謡

奄美では，シマウタ（島唄）といっている。『奄美民謡誌』小川学夫著では大きく，行事歌，仕事歌，あそび歌と分け，さらに各々をくわしく分けているこれに従って述べたい。

イ 八月踊り歌

（あ）ねうどり（根踊り）があった。各家をまわって踊るころは，これをしなければ八月踊りは成立しなかった。

八月しぃがど　きょたる　へぇく　うずでぃ　やどぅ，あけてぃ　くりんしょれ

（八月をしに来ました　早く起きて，戸をあけて下さい）

これは，うたわずに意味を説明したように思う。打ち出し歌のあとは，何でも歌う。（　）内は筆者の訳した大意。以下同じ。

（い）おぼこり

各家々から浜に踊りながら下っていった。その時に歌い踊った。

ハレー　おぼこりど　やゅる　　ハレー　かおほーしゃ　ねがお

（ハラヤ　オセ　オセー）　ハレー　やねぬいねぃ　がなし　あぶし　まくら　ヨンノ　　（ありがとうございました。果報なことでした。来年の稲ガナシは　あぜを枕　にするほど豊作だ　）

（あ）（い）は，基本的な歌として残っているけれども，後は，踊っている人々が「でー　○○しょう」ということによってされるわけで順番などは，はっきりしていない。

（う）諸鈍ぬ長浜

諸鈍ぬ長浜ぬ　いきゃ長さでぃも　池地長浜ぬ　うぃーや　きりきらん

（瀬戸内町諸鈍の長浜が，どんなに長くても，瀬戸内町池地長浜よりも長いとはいえない）

（え）はまちじょりゃ（浜千鳥）

はまちじょりゃよー　ちぃじょりゃ　なけば　おもかげぬ，まさて　たちゅり（浜千鳥よ　千鳥よ，泣けば面影が，ますます　たつよ）

（お）うみぬ　ささくさ（海のささ草）

海ぬ　ささくさ　や　とくぬくゃぬ　すでぃどころ　自分ぬ　すでどころ　あんま　ふちくる（海のささ草は，アイゴの子の　脱皮するところ．自分が脱皮してさくなるのは　ふさわしいところ）

（か）あいはと

あいはとうどり　いきゃーし　がや　うどりゅうる　いきゃーし　がや　うどりゅーる　ひぎゃりはぎーさげぃーて　にぎぃーりももいしぃて，

（あいはと踊り　どのようにして踊る　左脚下げて　右ももは　すわらして）

（き）なまぬうどり（今の踊り）

なまぬうどり　うどりこーがそろた　ソリヤ　うどり　ならえば　なーま　ならえ　ヤイキョリヤ　シヤ，ヌ　ハナキョラ　ショーシ　ヤンシャンセ

（今の踊り，踊り子がそろうた。踊り習えば　今習え）

（く）あまだ　さがりゃ

あまだ　さがりゃ　いゆんかまち　ハレ　やんくべぃ　さがりゃ　トッチブル　いじぃて　もぉーり　よ　ふっちゅんきゃ　ハレ　にざち　うぇーしぃろ　ヤーヤショ（あまだにぶらさがっているのは魚の頭　家の壁に下がっているのは，カボチャ　出ていらっしゃい　年より方，煮て差し上げましょう）あまだは，いろりの上につり下げた木の桟。タキギを干したりした。

（け）でっしょ（手習）

でっしょ　はじめたーそ　たがそ　はじめたーそ　やまと　きゅらうとじょが　はじめたっそー　ウマレショーナ

（手習始めたのは，だれが始めたか本土の清らうとじょが始めた）

（こ）若松様　または　にぎたろ

でっしょ　にぎたろ　若松様　ソレ　枝も盛える　その葉も繁る　ヤイキョラサ　ヤイキョラサーヌ　ハナキュラ　チョウチ　ヤンシャンセ

（さ）俊金くゃ

しゅんかねくゃーぬふしぃ　わがくなち　おせろ　しゃみせん　むっっち　うもれ　つぃきたね　サーサ　しゅんかねくゃ

（俊金の節　私が，歌いきってみせましょう　三味線もって　いらっしゃい）

（し）でーまちじょ

あそびーしぃろーとーほーけーのめぃだーしょれ　ハレーすぃろーとーほーけーハレ　ヨイヨイ　でーまちじょがやどり。

(遊びをしようと　ほけのめいだしょれ　でまちじょか宿り)

ほけのめい　だしょれ．意味不明　腰巻き忘れたでーまちじょが宿り。風呂いーろと　ほーけのをめいともある。

(す) さんやまのこきゅう

さんやまぬ　こきゅうや　やまとがで　とよむん　わんや　やまとから　きちぃ　きゃおた。(さんやまの　こ弓は，本土まで響き渡る　私は，本土から聞いて来ましたよ)

外に「赤木名観音堂」もあったが，大正5年生のＴＴは，一度も歌ったことがないということだ。「ききゃわんどまり」(喜界湾どまり)もあったが明治39年生のＹＡ　父が語っていたそうだ。歌詞は不明。

★ 餅もらい歌

(あ) 種おろしゃんせ　餅むれが　きゃおたど　むーちぐぁ　くぅーりたぼーれ　花のヤショラ　ハラドンドン　ジャ　クニイトサンセ

(種おろしだ　餅もらいに来ましたよ　餅を下さい　花のヤショラ)

旧１０月のカネサルに餅をもらった。隣村の名瀬市朝戸では，「カネサル　チェ　チェ　餅もーれが」というように打ち出し，はっきりカネサルといっている(西田忠博談)。城では，タネオロシムチムレをした(坪井久仁子報告)。

★ 婚礼の歌

(あ) ぐじんうた．大正5年生のＴＴの父が嫁入りの時に歌っているのを聞いた事があるという程度である。これは「御前風」で沖縄の歌の借用だろう。

★ 仕事歌

船おろしに「ヤイトコーセーヨ　イトをよぶ。昭和初期　城では歌っている人がいた。

★ あそび歌

(あ) はやり節又は朝花節

まれまれ　なきゃ　うがで　なま　なきゃ　うがめ　ば　なぁ　いちごろ　うがみゅかい

(久しぶりに　あなた方に会いました。今，あなた方にお会いすれば，もういつごろ会えるだろうか)

(い) くるだんど

一本杉　きろちきららん　なごちも　ながらん　一本や杉

こやし　まんじょ　古仁屋や　真　古仁屋ぬ　瀬戸内まわりば　こやし慢女

(う) だんかん橋

うく　みじぬ　いじて　だんかん橋　あれながらち　しので　きゅる　わんかなや　なちど　むどりゅん

(大水が出て　だんかん橋流らして　私の所にくるカナは泣いて戻る　)

(え) そんじょ主(俊良主)

そんじょしゅが　いなむんや　きんぎん　とうげぇ　かためて　さくしが　いもりゅん　うちうちぬ　にせんきゃや　さくしぬ　なまさて　ふざいむっち　さいばん　かかり。

(俊良主は，偉いね　３斤くわ　かついで作にいかれる。内々の青年達は，作におこたり，負債を持って　裁判ざただ　)

(お) かんつめ

ゆうべ　がで　あしだる　かんつめ　あごぐぁ　なーちゃぬ　ゆるなりば　ごしょが　たびち　みそで　ふりゅり　ダンチョ　ダンチョ　アワレナヨー　ダンチョ

(昨晩まで　遊んだ　カンツメ姉さんよ　翌日の夜になれば　後生の旅に　そでを振っていく　)

(か) よいすら節

舟ぬ　高ともにヨイスリ　しる鳥ぬ　いちゅり　スラヨイ　スラヨイ
しる鳥や　あらぬ　ヨイスリ　おなり神がなし　スラヨイ　スラヨイ

(き) 徳之島ちゅきゃり節　徳之島　かめじ　なんや　きゅらむんぬ　まんで　きゅらさ　まありとんば　あいきょうぬ　ねんちゅかな

(徳之島亀津には美人がたくさん美人に生まれているが愛敬がないそうだ)。

「いゅんめやん」「糸くり節」「いきゅんにゃかな」などもある。以上は，田中テツ子(大正5年生)へ突然，質問したあそび歌に対しての歌と，すぐ思い出す歌詞である。他に歌詞を教えていただいたけれども，他の本にもよく出ているありふれたものであったので省略した。

緑の流れ

・やあちぃと　ここのちと花ぬ緑ば結で　花ぬさおりりば　親ぬくと；思い

(八と九と花の緑を結んで　花が親の事を思え　)

・隠れとるうちや　隠れ道うもれ　よそしりてんから，ま道　うもれ

（隠れている間は，隠れ道をいらっしゃい　他人に知られてからは，ま道いらっしゃい。隠れながらと堂堂かも？）

・隠れくゃば　はらで、なしじ、きば　なたっとう　片うやにいゅんとも知らちたぼれ（隠れ子をはらんで，産す月になった片親に　いゅんとも知らせて下さい）。

・片うやに知らせば，むるうやに　しらしば　よそにしらりゅん。（片親に知らせば両親に知られる。両親に知られば他人に知られる）。

・親からしふめりゅん　よそから笑ゅん　くらしふぇぬ　山のぶて、きりふぇ瀬も。（親からせめられる　他人から笑われる　暮らしふぇぬ　山に昇ってきりふぇ瀬も）。

＊男が，カナがいなくなった。自分一人おられず　その時

男・しゅんち：かぬ　いね、や　し、てたんて、わからん　かなしゃん　おめさとと　ちゅみち　なりゅがり　いきゅん。（しゅんちの稲は，し、てたんて　わからない。愛しい人と一緒になるまで行くよ）。

女・わぬや奥山ぬ　ひとり花やし、が　いきゃし、が　くゅまとめて：　しのでおもちゃる（私は，奥山の一人花だが，どうして　ここを探してしのんでこられたか）。

男・奥山いじ、　しゃちゃんち　そく山いじ、しゃちゃんてふん　色や隠さるんば　においし　しるん。（奥山へ行って咲いても，そく山へ行って咲いても，色は隠せてもにおいでわかる）。

女・かなばぇわかりとて、においしっちゃん男，もんに例れば，いぬぬ生まれ。（普断，別れていて，においを知っている男　もんに例えれば犬ぬ生まれ）。

男：いぬゅあて：ん　しりゅめ、人あて、ん　しりゅめ：しちじんからど　にわきりゅっっか。（犬でも知るか　しちじんからど　にわきりゅっっか）。

＊女が，プーンと山上がりしていないようになり，みやま奥いきふば，ガラスギィマくささ。（深山にいくと，ガラスギィマがくさい）と言った所，　ガラスギィマが，そこにいて　その女に返事して，

やがしじ、なんかなりや　くゅりゆんま　くささどお。（君が死んで７日なる時は，これよりもくさいよ）。そこで，プーンと化けてあるのですよ。

・みやま奥山なんて、ちゅくゅい鳴きゅん鳥や　くゅいや　聞きゃりゅんば，からだみ、からん。（深山奥山で，一声鳴く鳥は，声は聞こえるけれども，身体は見えない）。

＊ここまで１２で　ちゅぐたり（一とおり）になる。どこにも行き先がなく，

男は，羽根切れ鳥になり，木の切り口に止っていた。

・松ぬ切り口なん　ゐちゅるとび鳥，ち、ゅん　うさわって：　とびんならん。（松の切り口にすわっている飛び鳥，露をかぶって，飛び立つこともできない）

・とび鳥や　もちょり　先みちどゅ　とびゅり　自分や　ぬゅば　みちば　通ていきゅる。（飛び鳥は，もちょり　先を見て飛ぶ　自分は，何を見て通って行けるか）。

・わぬや　いきちゅりぬ：ぶとほむんやし、が，ぶとおさゅんときや　なきゃど　たんびゅん。（私は，いき　ちゅりぬ　ぶとほむんだが　ぶとを押さえる時は，あなた方を頼む）。

・わぬや　このしまなん　親　はるじゃ　うらんが　わんかなしゃ　しゅし、ど　わん親はるじ。（私は，この村に親，親類はいない　私をいとしくしてくれる人が私の親，親類だ）。

・しまーや　だぬしま　いじん　かわるぎ：やねん　み：じに　ひきゃされてくゅとばだけ　ちがゆん。（村は，どこの村へ行っても　変わっている訳はない　水にひきゃされて　言葉だけ違う）。

・わしま　面影や時々どたちゅる　わーかな面影や　朝夕たちゅん。（私の村の面影は，時々浮かぶが，私のカナの面影は，朝夕浮かぶ）。

・はまちじょりや　ちじょりや　泣くな　ちじょりや　鳴けば面影ぬ　まさて：たちゅん。（浜千鳥　千鳥　鳴くな　鳴くと面影が特に浮かぶ）。

・わぬや　うらきりふで　浜うりふてみ、りば，ちじょりや　浜ちじょりぬ　ひとつ　とで：　いきゅん。（私は，心がこがれて浜へ行って見れば，浜千鳥が一羽　飛んで行く）。

・飛んでいきゅる　浜ちじょりぬ　先ち、きて、みゅりば　いきさきぬ　ねぇじいちどうたん。（飛んで行く浜千鳥の先を追って見ると　行き先がなく　すわっていた）。

・いちゅる浜ちじょりゃに　むぬたずねし、りば　片ばねや　ねらじ飛びやならん。（すわっている浜千鳥に，物たずねしたら片羽根がなくて，飛ぶことができない）。

＊ここまでで一応，半分終わることになるらしい。それから，続けた分は，

・うくゅとばにふりて、うなさけにふりて、五尺ある体　なきゃにんわたしゅん。（御言葉にほれて，御情にほれて，五尺ある身体，あなた方に渡す）。

・一度しゅみゅがりや　ゆきみふじぬ心　二度ど　しゅで：からど　まはだ心

（一度，交わりするまでは，雪水の心，二度交わってからは，本当のはだ心）

・千ゆるば通て，五十ゆるどはだすだる。九百五十ゆるや，ただし帰たん。

（千夜通って五十夜，はだを交じえた。九百五十夜は，何もせず帰った）

・ただ帰えたん九百五十ゆるや，どの気持あたり，気持ち数えりば，通いなりゅめ。

（ただ帰えった九百五十夜は，どの気持だったか，気持ち数えれば通われない）

・心きゅらさて，ど千ゆるま通て，心悪さりば通いなりゅめ。

（心美しいから千夜も通った，心悪ければ通うことはならない）

※縁の流れは，泉牧貞（明治２１年生）より，教えていただいたものである。「４８あるが全部は，とてもできない」ということである。二人いて一人が下の句をやればできるそうだ。残念であるが，これだけでも記録できたことを喜びたい。耳が不自由になったため，質問をきぎゃまらさく（面到くさく）思われる。９０余才になられても，水に流すように覚えておられる記憶力には，敬服するばかりだ。これを教えてくれた人は，古見の人でホーグマといった。部厚い本を持っており，風呂敷に包んで，どこへでも持参していた。山小屋におるとき，息子の急病を知らされ，山小屋に置き忘れた。不幸にもその小屋が焼けてしまい，灰になってしまったと。それがあれば，もっと習えたのにと残念がる。山の神の祭詞なども教えていただいたそうだ。

わらべ（童）唄

（あ）子もり唄

（１）ヨウハイヨー　ヨッコロハイヨー

あんまが　はてちいじ，（母が畑へ行って）

き，んがりや　なかぐ，にし　（来るまでは，泣かないようにして）

まっっちゅりよー　（待っていなさい）

（２）ヨウハイヨー　ヨウハイヨー

あんまぁーや　はてはちー　（母は，畑へ）

とんとりが　いじゃんど　ー　（いも穫りに行ったよ）

ヨウハイヨー　ヨウハイヨー

なあきゅーと　なあーきゅ，とおー　（もう来るよ）

※後半部，個人個人が勝手に作れるということである。

「あんまが　はてはら　むど，て，　きゅどー」（母が畑から　帰って来るよ）

「よはさんにゃー　まっちゅりよー」（ひもじいの待っていなさいよ）など，種々である。

い）まりつき唄

（１）ひ，ーふーみ，

ひ，ーふーみ，ーよ，いーむ，

ななや　このとお

※まりを二個持ち，打つときもうたった。

（２）てふご　ーご

てふ　ご　ーご　　たあ　ご　ーご　　み，　ご　ーご

よ，　ご　ーご　　いち　ご　ーご　　む，　ご　ーご

なな　ごー　ご　　やー　ご　ーご　　この　ご　ーご

さく　いしゅいしゅ

※「さく　いしゅ　いしゅ」から「てふ」へかえる，くりかえし。

（３）てふ　ーしゅんが

てふ　ーしゅんがしゅんが

たあーしゅんがしゅんが

「み，ー」「よぁー」「いち　」「む，ー」「なな」「やあー」「このー」「とぉー」の後に各々，「しゅんが　しゅんが」をつける。「とぉ　しゅんがしゅんが」までいくと，「てふ　ー」にかえる。

（４）きょーろ

きょーろ　きょーろ　ないてぬ　きょーするか

よいまつ　たけなべ　こー　こー

さかづき　とんとなり

いしゃーの　まーえは　つくづく　とおーして

はなの ひざりさんに　わーたした。

※ゲタまりといわれるゴムまりを左の人に打ちながらわたした。

（５）とんととなり

とんと　隣のうなぐじょろしや，

顔が　しやくして　　お目が　ひとめで

鼻が　すすばな　　口は　わにぐち

てぇは　まんでて　　いしょや　びびいしょ

すで，が　なしげた　ゆむし　げたね

ひきどんーびき　ひきどんーびき

(6) きょうから

きょうから　おおさから　にい様は
いちり　かざし　に.. り　ぐ; し　かがみ
さんり　あぐれて　し,, り　ごむ　たてて
いっかん　ち,, きまわーせ　まわーせ

(7) ぼんさん

ぼんさん　ぼんさん　なぜ泣くの
おゃん　も　おらんば　子もおらん
ただ　ひとりの　ぼんさんが
山から帰って　血をはいて
何かと思えば　四十九日　四十九日が過ぎたので
電信柱の餅つき生まれ
人が通れば　ちょいと　かーくす

(8) て:, ーち

て:, ーち　て:, ーちぐ; み
た, ーち　た, のはな　　み,, ーち　み,, のはな
いちいち　いそかさ　　む; ーち　む, のはな（以下不明）

(9) せいぞうさん

せいぞうさんは　きりふがし
すすまの川は　波あらし
あるこに聞こゆる　もの音は
さかまつ　めずか　つばものか
のぼる　朝日に　働きに
ひらめし　ひまは　あーくる　あくる

※T 5年生の人が，小学5年生のときに和瀬に手伝いにきていた古見方の女の子が歌っていたのを覚えた。

(10) かて:, よ　まる（勝てよマリ）

かて:, よー　まるっっくわ　（勝てよ　マリ）
あくちゃ　ばんぐ, わ　（もくたちばなの実の飯）
ぬか　ばんぐ, わ　（米ぬかの飯）
た, ち　かましゅんど, ー　（たいて食べすよ）
ま, るくわ ー　（マリ）

う）おてだま唄

(1) すすら　すすら

すすら　すすら　いっぱい　なて　すすら
いち　に　‥　‥　‥　‥とできるまで

※おてだまのことを，すすらといった。上の唄は，二個，三個持って遊ぶときに歌った。一つの唄で三つの遊び方があった。

(2) おひと　おひと

おひと　おひと　おてんぱらし
おふた　おふた　おてんぱらし
おみみ　おみみ　おてんぱらし
およよ　およよ　おてんぱらし
びきせん　びきせん　びーきせん
かき　一俵　二俵　三俵　四俵　五俵　もーらった
五俵もらった　もーらった
おかんそー　おかんそー　おかんそー
いつも　たんたん　たけみつ
あすは　天気のはな　ピーラ　ピ,
たつのこい　いっしゅう　もらった

え）あそび唄

(1) カボチャ

とっちぶる　とっちぶる　たっかなかち（南瓜，だれがなかした）
しぶりぬ　なかさんば　たっか　なかしゅ（冬瓜が泣かさなければだれが泣かす）
よーねや　なすびに　くびらしゅど　（今夜は，なすびにくくらすよ）
なーくな　なーくな　とっちぶる　（泣くな泣くな　南瓜）

(2) もめんざらざら

もめんざらざら　もめがいくやら　つばめがとお　やら
もちで　おさえて　くださいね
ほおーづき　とんとん　ずくずく　とんとん
あした　あした　なーにか
ソーラ　ソーラ　ソンピンゾ　ヨーシ
ひとさら　ふたさら　み,, さら　よお さら　いちさら
むうさら　ななさら　やざら　やさんぬ　あいつ
い,, ーつつ　むーつ　たなぼとけ

※「かごめ　かごめ」と以ており，一人が中央にしゃがみ，他は手をつないで囲む「もめんざらざら～ヨーシ」まで，まわりの人が歩く。中の人が「ひとさら～たなぼとけ」まで，まわりの人の頭を指差し「ぼとけ」であたった人と交替する。

(3) あっからきゅん

あっから　から　きゅん　むち重　(むこうから来る餅重)
たる　もれがーぬ　むち重が　(だれをもらいにか)
わん　もれがぬ　むち重だろう　(私をもらいに)
わが　に、ぎりば　にぎ、たんち　(私が逃げれば逃げたと)
いゅうなよー　どうしんきゃー　(いうなよ　友達)

(4) 兄さん　兄さん

やくめふや　やくめふや　だあち　うもち　だあち　うもち
やくめふや　やくめふや　やまとかち
けふんぶつ　し、が　もおーし　もおし
わぬや　わぬや　○○　ぐわんたてふて、　ぐわんたてふて、
はし　し、ぬ　うめかな
なあちゅめふ　み、らだなやー　み、らだなやー
あじがなしぬ　とじなりば
いちゅぎん　まんぎん　ち、これぬ　あぐまさやー　あぐまさや
なあーなり　めえーちゅち、よー，わんな　うーめふ　かな　うーめふ　かな
なあーなり　ごのこち　よー，わんな　おーめふ　かな　おーめふ　かな

※（意訳）兄さんは，どこへ行ったの，兄さんは，大和へ見物しに行かれた。私は，○○に願たてて，はししめうめ加那　もう一目みたいな。あじがなしの妻になれば，絹の着物の破れをつくろうのがつらい。

もう少し，額の方で髪をゆわないか，おーめふ加那，もう少し後頭部の方で髪をゆわないか　おーめふ加那。

(5) 青山こぞ

青山　こぞから　青いのが二つ，三つ，
その時，はいからさんが　はかまはいて
ちりぽんが　ぽおし
さー　いっけん　とられば　二けんじゃ
二けんとられれば・・　・・　・・（以下不明）

※「せっせっせ　夏も近づく八十八夜」と似ている。

ホ) 遊び唄・ユングト　・言葉遊び

(1) いっしょろばんさ

いっしょろばんさー　やあーばんさー
かにくぬ　ばひくわが　むかじにささとて
あきたゅうー
こきたゅうー

※いっしょろばんさは，シーソこと高倉に登るはしごなど　よく使われた。

(意訳) シーソ　シーソ，金久のおばさんが
むかでに刺さって　あきたゆ，ー　こきたゆ，ー

(2) たっちゃり　いっちゃり

A・B「たっちゃり　いっちゃり　たったゃり　いっちゃり　たっちゃり　いっちゃり」(立ったり，すわったり)

A　「月ぬゆるくわ　月ぬゆるくわ　牛ぐわ　ち、なぎがうもらんなあー」(月の夜，牛を継ぎに行きませんか)

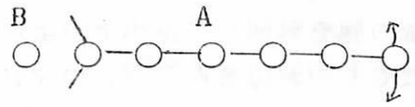
B　「わんや　かまち、いっちゃさて、いきょうらんから　なん　み、ちもれーれ」(私は，頭が痛くていかないから，あなたが見ていらっしゃい)

A・B「たっちゃり　いっちゃり　たっちゃり　いっちゃり・・　・・」

A　「なあん牛ぐわ　わん牛ぐわに　ち、きくさって　たけはら　けえーてうりようらんど。　く，りや　牛ぬかまち　く，りや　牛ぬはぎ」(あなたの牛は，私の牛に突きころされ崖から落ちていないよ。これは頭，これは牛の脚) と，木切れなど拾って持ってくる。

B　「あとな　おりょっっか」(後にいますがね)

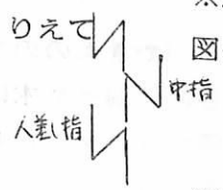
Bは，おにで，Aのむかでのようにつながっている数人の一番後ろの子を，つかまえようとする。前の人は，手を広げ防ぎ，後ろの人は，左右に逃げる。



※このころは，みんな着物をつけており帯を結んでいるので，帯をつかんで立ったり，すわったりする。

(3) みちぬくわ

みちくわぬ　なありえて
きーえて



※地面に人差し指，中指を交互に使って図のように描いていく。くりかえす。

(4) やまよう

やまようー　よう　ー

※けんがらは，ヌジリミナ（トコブシ）

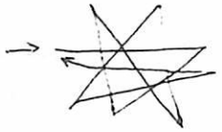
やまなん　けんがら　さげとて　　の殻，これを糸で何個もつ
あちゃぬ　びんから　　るして，木にぶらさげなが
てぬぐいよー　てぬぐいよー　　ら遊んだときのユングトゥ
（意訳）山に殻をさげていて，明日の便から手ぬぐいをね。

（5）はんど（水かめ）

はんどはんどばけつぬはんど　いち

※はんどは，陶器の大きいかめで水入れに主に使った。図のように書いた。

（意訳）はんど，バケツのはんど



（6）日本で

日本でー　できた　たんもや　やまかたや
やましたや　竹の内　　ちびり　リンゴ　ゴトク
クロバトキン　きんのたま　まーけて逃げるは
チャンチャンボー　ぼーでうつのは　犬ごろし
犬の尻は赤いな　鍋の底は黒いね
ねずみの口は　悪口じゃ　ジャンケンポン

（7）めんちゃま

めんちゃまーど　めんちゃまーど
あめふり　がなしぬ　めんちゃまどー
よーーえーえーら

※編者意味不明

（8）いいちゅぬくわー（金持の子）

いいちゅぬくわー　いいーどち　いいどぉ（金持ちの子はいいな）
とーりきりきん　きーり　きーり　（よい着物をつけて）
あしびが　いもち　（遊びにいかれて）
ねんぬくわー　じるんくーしなて　（貧乏人の子は，地炉の後ろで）
わんわたふがちーかーもーやー　（豚の腸を料理して食べようよ）

※「あんま　わあーたり　かまん　くしーなて」（お母さん二人，カマドのうしろで）と入っているのもある。

（9）かさばちくわ

かさばちくわーや　なきゅり　（できもののできた子は泣くし）
しんぶくれぎーや　めーらじー　（湿った木は，燃えないし）
やれはがまや　むりゅり　（破れはがまは，もるし）

※「やぶれはかま」の方を先に言う人もいる。

（10）かめんこ

ちゅうり　たーり　あやいんぐわー　（一人，二人　綾犬）
ゆーでくーば　かめんぞー　（呼んで来い，かめんこ）
くすなべーりゃーや　（くそをなべるのは）
うりじゃ　くーりじゃ　（それだ　これだ）

※輪になって一人が中に入り，歌いながら人差し指でさしていく「くーりじゃ」であたった人が中に入り，歌いながらさしていく。

（11）たおーなぎゃ（せきれい）

ちん　ちん　たおーなぎゃ
あんまめーち　きゅらうどり　（母の前に，美しい踊り）
じゅーめーち　はごうどり　（父の前に，醜い踊り　）

（12）いーさとまんにゃ（カマキリ）

いーさとまんにゃ　なんさいか
いーさとまんにゃ　にーさいか　（二歳　三歳……）
いーさとまんにゃ　さんさいか‥つづける

※カマキリをつかまえて，棒でつつくと怒る。これを踊りといった。たばこのやにを棒の先につけると，よけい踊った。

（13）やまいん（オケラ）

やまいん　やまいん
いやーじゅ　ふぐりや　いきゃんべーり（君の父の金玉は，どれ位大きいか）
かんべーり　（これ位と，オケラが大きさを示すようにする）

※近くの東仲間村では，「いんぬ　ふるふる」（オケラ）といった。

（14）ちーにゃまんこー（かたつむり）

ちーんにゃまんこー　ちーんにゃまんこー
いゃが　いじらんば　（君が出なければ　）
○○どんに　はなきらそー　みーんきらそー（鼻切らそ，耳切らそ）

※○○には，人名が入った。

（15）あんまがふー（母のおなら）

あんま　ふー　しーちゃっと　（母が，おならしたら　）
じゅーが　おどっっち　（父が，驚いて　）
きしぬ　がぶっぐわし．　（きせるの頭で　）
びんた　うたって　（びんた，打たれて）
「あいた」ち　いちゃっと　また　うたっって　（痛いといったら，又

打たれて)

(１６) なーちゅけぇり (もう一回)
なーちゅけぇ り しるこざま
なーちゅけぇ り しるこざま
※馬が浜で，横にころぶさまを見て，喜んでいるみたいに見えた。何回もくり返し，調子を合わせていった。馬も元気のあるときしかしなかった。

(１７) くぅみちゅ
A．くぅみちゅーぬ めぃはげー (古見方の目はげ)
たばこ もぅっそれー (たばこをどうぞ)
B．はげぃる ちゅうどぅ はげるっっか (はげる人しかはげない)
ごっっと がり はげぃるんにゃー (皆まではげるか)
※A の悪口に対して，古見方のB が言ったという。B には古見方の発音のしかたに変わったところがあり，それをまねした。古見方の人々は，早朝から農産物を背負い市街地へ行き，荷を背負ったから目のはげた人が多かったのではないかという話もある。

(１８) おばらいっしょう
※何かを歌ったあとに次のように歌った。
ひらいてー かちまして あんしせ
かんしせ ー おーのせ おおきり
おばら いっしょう

(１９) 先なる人
先なりゅんちゅ うとぅ くぁーぬ (先になる人は，夫，子へ食
むんし、きべぇー 物を食べすばかり)

(２０) 後なる人
後なりゅんちゅや まごぅて、ーち (後になる人は，かごの一つ)
くぁーなしゃ 子を生す人)

(２１) 風
風ー 風
にしぶーち いき、ー (名瀬市根瀬部へ行け)

(２２) 雨ゴーゴ
あむい ごぁー ごぁ (雨ゴーゴ)
ゆき ごぁー ごぁ (あられ ゴーゴ)
〇〇で はれ、てぃ たぼれ (晴れて下さい)

P96の(23)のつづき ながれ てぃ いくり (流れて 行くよ)
※ほーと は，ビワのような黄色づく果実，行く方言でいるり。
※(23)は96ページの上にあり。

(２４) さんてん
さんてん さんてん
さん ころりー
※してもしても，ものにならないときに言う。

(２５) おーだ
おーだ おーだ やれおーだ (破れおーだ)
もっこ もっこ やれもっこ (破れもっこ)

(２６) ナヴィコ
ナヴィンコー プ、 プ、ー
シチャ プ、ー プ、ー
ヤレ プ、ー プ、ー
おやし、や まめ、じゃが
※ナヴィンコ (い掛けや) が呼んで歩くときのかっこうのまねか。

(２７) 鳩の鳴き声
うとん ピィー ピィー
とぅじ ピィー ピィー
ましゅん ねんば (塩もなければ)
みしゅん ねんば (みそもなければ)
うとん ピィー ピィー
とぅじ、ピィー ピィー
※とぅじ (刀自、妻) を盗まれたので，とぅじ ピィーと四～五月ごろ泣くという。
うー うー
※牛鳩の鳴き声。子供が，うーうー泣くときは，「牛鳩じゃが」と言った。

(２８) カラスへ向って
ガラス ガラス 鉄砲 矢ーぬ きゅんど
弓矢ぬ きゅんど トーン
※きゅんど (来るよ)

(２９) 鶏の鳴き声
クッ クッユー ウー

(２３) えいえい　ほーと

上) えい　えい　ほーとぁーぬ　(えい　えい　ほーと　が) Ｐ９５へ

(３０) 赤ひげ鳥

赤ひぎぃさしば　米ぬ　2、3升や

とったもんだ　とったもんだ

(３１) 磯ひよどりの鳴き方

いいちゅ　ひー　しぃりば

いいきもち

※ひーは，女陰

(３２) かねぶしょ

かねぶしょ　かねぶしょ

いっきんとり　かねぶしょ

※火打ち石といわれる白みがかった石を二つぶっつけると，火花が出る。その時にいった。

(注) わらべ唄については，田中テツ子の伝承を中心に，厚ヨシ，与ツル，田中トメ，伝正子の皆さん方からの聞き書きである。

へ) 口むとぅ (まじない言葉)

(１) 地震の時

・きょうぬ　ちぃか

きょうぬ　ちぃか

とんちぃか　とんちぃか

・よぉんねぶー

よぉんねぶー

※よぉんねぶは，かんぴょう。

(２) 雷の時

くぁぎぃ　むとぅ　(桑の木の根本)

くぁぎぃ　むとぅ

(３) 夜，家内を掃く時

むしき　むしき

(４) 草村に入る時

とぅ　とぅ　がなし　とうとうがなし

ぎぶしぬ　くぁーや　むんや　しぃりょうらん (人間は，ものは知らない)

めぶーや　めぶきぃれぃよらん (目は，みつけきれない)

とぅとぅ　がなし　とぅとぅ がなし

(５) 目にごみが入った時

わぁーめぶんちり　きゅう　いじぃり (私のごみは今日，出よ)

ガラスぬ　めぶんちり　あちゃ　いじぃり (カラスのごみは明日出よ)

※まつ毛をひっぱればよい。

(６) ものもらいが出た時

いびる　いびる　(ものもらい)

ぶやあー　ぬが　ぬきゅーる (君は，何を突くか)

わんや　わん　うとぅとぅ　ぐぁぬ (私は，弟の子)

いびる　どぅ　ぬきゅーる (ものもらいを突くよ)

※末の子が，人差し指で突くまねをする。

(７) 歯が抜けて捨てる時

・ガラスぬ歯や　あちゃめぶーれ (カラスの歯は明日生えれ)

わん　歯や　きゅうーめぶーれ (私の歯は，今日生えれ　)

・ゆみゅんどりぬ歯と　(すずめの歯と)

いんけぇ　めぶーれ (同じように　はえれ)

※足をそろえて，上の歯は床下へ，下の歯は屋根へ投げる。

(８) くしゃみをした時

いんにゃ　くぅれ　(くそを食べれ)

くぅす　くぅれ　(くそを食べれ　)

※なぜそういうか，民話がある『和瀬の民話』７７ページ参照。

(９) 腹が痛い時

いんにゃ　なーれ (くそになれ)

くぅす　なーれ　(くそになれ)

※腹をなでさする

(１０) ぶつかった時

がぶ　じぃんなー　(こぶでるな)

そが　じぃんなー

※なでる。そがは不明。

(１１) どぅばれ口 (自身を清める口もと)

あやんくさらぎ　うがん　わぁーきぶさわきな

そろてむん　かん

うてがなし　うがみたてまつりょろ
なあー　げ゛ーうちな　生まれうりょん
ねんとしぬ　うくくまれ　しぶぐれまぁれ
じょう　吉日　じょう　日柄　しるげて
朝口入りて　夕口いりて　かざほ
いっっちょう　おこなて　うぇーせりよんから
うけとて　くぅりんしょち　たぼれ

※以上は，口を入れるときの，どばらい口である。口は，田畑英勝先生が，『奄美の民俗』でも指摘しておられるように口外することは，禁止している。それを，編者も，なにげなく録音したものであり，一息で，話されたことで，早口のため聞き取りにくく，もしかしたら録音と文字化したのに違いがあるかも知れない。説明によると，あやんくさらぎは，シマのもとノロという事である。「ハブの口」をとなえるにしても，これから始めなければならないということだ。

徳之島町井之川でも，口の前には「ウナをとなえなければいけない」ということであり，その時に始めにいわれたウナは，やはりノロの名前であった。（杉直秋氏談／９７９年／２月故人）。すでに，かなりの口が集められている（『南島歌謡大成』）が，これらを述べるにあたって，ノロとの関係はどうだったか。また，終りに「アブラウンケンソウワカ」と呼んだりする。

真言密教系の山伏・宝印・陰陽師などの影響のもとの口があるのではないかと思っているけれども課題である。

どぅばれ口の後にすぐ，にぎん口（とげがのどにひっかかった時の口）を続けられた。

（１２）にぎん口

うーねりやば　いきょて　うー　ゆぅ　ばとて
うーに　ぎば　ぬぅで
くぅに　ぎぃや　いきょーて　くぅ　ゆぅば　とぅて
くぅに　ぎぃば　ぬぅで
ゆくに　ぎぃば　ぬぅで
たて　にぃぎぃば　ぬぅで
ゆく　に　ぎ　なりば　うてて
たて　に　ぎ　なりば　うてて
むとぬ　はどぅ　くに　させてたぼれ

（意訳）うーねりやにあって，大魚を取って，大きいとげを飲んで，小さいとげに会って，小さい魚を取って，小さいとげを飲んで，横とげを飲んで，たてとげを飲み，横とげは落ちて，たてとげは落ちて，もとの身にさせて下さい。

（１３）ハブ除けの口

うすじ　いきば　さくまわて　（頂上に行けば谷間に回り）
さくまわりば　うすじまわて　（谷間に回れば頂上を回って）
いきち　げぇ　やりち　げぇ　（行きちがい　やりちがい）
とらち　くぅりりんしょれ　（させて下さい）

（１４）頂上を越えた時のはらい口

おがわのぶちに　おねぶわすれて
おんあい　おんあい

※この口は，なぜ，言われるのかは不明だけれども，自身でも「おーさん口むとぅ」（おかしい口）と語った後は笑われた。そして「神様のしきたり」だからだということである。

（１５）悪夢をみたとき

いみぬぅ　ふりむんや　（夢の馬鹿者は）
いみ　みちゃんち　（夢をみたって）
いみ　がたり　すぅんな　（夢語りするな）
いみや　はるばるぬ　（夢は，畑などの）
くさぬ　うらはど　みぃりゅん（草の裏葉をみている）

※昔話もある。和瀬では伝承されていない。

（１６）しまったものなどが見つからないとき

ちぃじ　ちぃじ　わん　○○
だぁち　いじ

※ちぃじはつばで，つばを人差し指につけて，手をたたくと，つばが飛んでいく方を探す。○○にはさがしたいものを入れる。

— 付録 —

※紙数の都合で，項目だけを記す。

１．住用村部落貸付林について（村長）Ｓ４９、８、７．
２．声明書に反論（議員／名）　８、１１．
３．声明書　和瀬部落貸付林立木払い下げについて（村長）　１０、６．
４．村長声明に対する反論（議会議員７名連記）　１０、２４．

5．声明書　(住用村和瀬部落民一同　代表区長，前区長2名連記)

6．声明書に反論（5．の2名の声明書）（住用村和瀬部落在住　8名連記）

7.村長の行政執行に違法不正はなかった

(1). 和瀬貸付林問題について，県や検察当局の取り調べを受けたが，村長の処置に誤りのなかった事が明らかになった

(2). 和瀬貸付林の売買は部落に於いてなされ，村当局はタッチしていない事が明らかになった

(注)「いずれが是か非か，住民一人一人がよく読んで，判断しましょう」という見出しで，1～6までの広告文が載せられている。

「明るく住みよい住用村をつくる会」によってである。

参考文献

『民俗調査ハンドブック』上野和男他編

『民俗研究ハンドブック』上野和男他編

『蘇刈民俗誌』登山　修

『住用村勢要覧』住用村

『文化人類学調査実習報告』国際基督教大学
　一住用村　城，市一

『民俗文化』第二号　一住用村　川内一　跡見学園女子大学民俗文化調査会

『民俗文化』第三号　一住用村　見里一　跡見学園女子大学民俗文化調査会

『南島歌謡大成』奄美編　外間守善他編

『奄美の民俗』田畑英勝

※．めぶ．けえなどの．印は．発音についての注意で，必ずしも発音どおり表記されていないことを示しています．

あ　と　が　き

ミィーニシ（新北風）の吹く季節がまた，来ました。和瀬の海はなぎで，対岸の市方面には，白波がかぶさって見えます。たおなぎゃ（セキレイ）が飛びかい，山には，タァー（タカ）の鋭い鳴き声が聞こえます。

お世話になって四度目の秋です。多くの方々の御援助により，民俗誌をまとめることができました喜びを，かみしめています。編集を終えるにあたって，限られた枚数の中でぬかした項目もあり，また，私の力量不足のためにとりあげた項目の中にも十分に記録されていないこともあるように思われます。しかし，たたき合がなければ深まりはないと思います。小誌が和瀬の人間研究の出発点の一つにでもなれば，ありがたいと思います。すでに和瀬での聞き書きを中心に住用村まで広げたいくつかの断片的報告もしていますので合せて読んでいただけますればありがたいです。

和瀬のカメ話　『奄美郷土文化』第7号．1977（S52）

スィチとシバサシ　『奄美郷土文化』第8号

和瀬のムチムレ　『奄美郷土文化』第10号．1978（S53）

和瀬のオツキマチ　『奄美郷土文化』第10号

和瀬の年中行事（1）　同上　同上

和瀬の年中行事（2）　同上　第11号

同上　（3）　同上　第14号．1979（S54）

同上　（4）　同上　第15号．

住用のいいぐさとう（俗諺）　『住用の教育』第3号．1978

住用村年中行事概要　同上　第4号．1979

子供の遊びについて　同上　第5号．1980

人命を奪ったケィンムン　グラフかごしま11月号．1979

葬制における「シマ見し」の分布『南島研究』第19号．1978

住用村の年中行事と食　同上　第20号．1979

奄美和瀬の婚姻雑話　同上　第21号．1980

住用村和瀬の民話について　奄美郷土研究会紀1980

住用村和瀬の童唄　しまうた第7号　1980

『住用村和瀬の民話』郷土文化研究会　1979

編集後も種々教えていだいた。これらについては，後日，機会をとらえて発表していくつもりです。

小著も，また，刀自栄子がタイプを打たなければできなかったといえましょう。

編者略歴

1943（昭18）年．鹿児島県大島郡徳之島町井之川生

千葉大学教育学部卒業．瀬戸内町立阿木名小学校勤務を経て現在住用村立東城小和瀬分校教諭．

主な編著

『阿木名校区誌』，『瀬戸内町誌』（民俗編），『わたしたちの住用村』（以上共編），『瀬戸内八月踊り唄集』（自家版），『住用村和瀬の民話』（郷土文化研究会刊）

奄美大島　住用村　和瀬民俗誌

編　者　本田碩孝　　1980（昭和55）年11月25日発行

発行所　住用村教育委員会　　鹿児島県大島郡西仲間．